

## パラリンピックの過去と未来に関する一考察

高松 祥平

COVID-19の影響により、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が延期されることになった。日本における五輪の開催は今大会で4度目（過去3度は、1964年東京、1972年札幌、1998年長野）であるが、「一生に一度のイベントかもしれない」と、心待ちにしていた人々も多かったであろう。本稿では、比較的認知度が低いと思われるパラリンピックに焦点をあて、その歴史を振り返るとともに、抱える問題について紹介してみたい。

近代オリンピックの歴史は、古代オリンピックと比べると浅く、1896年アテネにて第一回大会が開催された。パラリンピックの歴史はさらに浅く、1960年のローマ大会が第一回大会として位置づけられている。また、パラリンピックはオリンピックの起源とは異なり、脊髄損傷治療の専門家であったグットマン博士がリハビリの一環としてスポーツを導入し、所属するストーク・マンデビル病院で開催していた競技会から発展させたイベントである。ちなみに、パラリンピックという名称は、両下肢麻痺を意味するパラプレジアとオリンピックを掛け合わせた造語である（現在では、その他の障害を持った選手も参加しているため、パラレル（もう一つの）+オリンピック=パラリンピックとして認知されている）。2001年には、IOC（国際オリンピック委員会）とIPC（国際パラリンピック委員会）が協定を結んだことにより、2008年より正式に開催都市においてオリンピックとパラリンピックが連続開催されるようになった（International Paralympic Committee, online）。

現在では、パラリンピックに限らず、障害者スポーツの認知度も高まり、競技レベルも大幅に向上した。わが国においても、2011年に制定されたスポーツ基本法に「障害者スポーツの推進」が明記されたことが、認知度や競技力の向上の後押しをしている（1961年制定のスポーツ振興法には、障害者のスポーツに関する記述はなかった）。しかしながら、急成長を遂げているからこそ、大きな問題に直面しているのも事実である。その一つが、障害を持ったアスリートが健常者の国際大会に参加する際の公平性についてである。そもそも競技の内容が異なっていたり（例：ラグビーとウィルチェアーラグビー）、記録があまりにも違ったりする（例：マラソンの世界記録は2時間1分、車いすマラソンの世界記録は1時間20分）場合には、この議論は必要ないのであるが、2名の陸上競技選手の登場が世界に論争を巻き起こした。オスカー・ピストリウス選手とマルクス・レーム選手である。両足義足のピストリウス選手は、100m10秒91、200m21秒30、400m45秒07の記録を持ち、世界陸上への出場を果たした（残念ながら、現在は恋人を射殺した罪で収監されている）。片足義足のレーム選手は、ドイツ陸上選手権に出場し、走り幅跳びのドイツ王者になっただけでなく、自己ベストの8m40は、ロンドンオリンピックの優勝記録を上回る。ここで議論のポイントとなるのが、義足の有利性である。卓越した製作技術により高度化した義足の使用は、国際陸上競技連盟（World Athletics, 2020）のRule 144にある規則「6.3.3 Except for shoes complying with Rule 5 of the Technical Rules, the use of any technology or appliance that provides the

user with an advantage which they would not have obtained using the equipment specified in, or permitted by, the Rules.] や [6.3.4 The use of any mechanical aid, unless the athlete can establish on the balance of probabilities that the use of an aid would not provide them with an overall competitive advantage over an athlete not using such aid.] に抵触してしまうのである。そのため、義足が競技に有利に働いていないという証明ができなければ、彼らは健常者の出場する国際大会に出ることができなくなった。当初、リオデジャネイロオリンピックへの出場を目指したレーム選手も、このことを証明することができず出場を断念した経緯がある。義足の反発力等の客観的な指標による判断はもちろん重要であるものの、義足を使いこなすまでの経緯や本人の努力といった数値では測定することのできない観点を考慮することも必要であろう。

一方、少々話は逸れるが、重度障害者のスポーツや日常生活にも注目すべきだという意見もみられる。パラリンピックを始めとした競技スポーツの発展によって、前述した論争まで起こるようになったものの、「何かを掴む」「起き上がる」「階段をのぼる」といった障害者の日常生活動作をスムーズにこなすための技術は進歩しているとは言い難いのが現状である。このような背景から、サイバスロン (CYBATHLON) という大会が2016年から開催されている。サイバスロンの目的は4つあり、それぞれ「Promoting research, development and implementation of assistive technology for people with disabilities (障害者のための支援技術の研究・開発・実用化の促進)」「Building a common platform for technology developers, people with disabilities, and the general public (技術開発者、障害者、世間のための共通プラットフォームの構築)」「Informing the public and stimulating discussion on inclusion and equality of people with disabilities in everyday life (日常生活における障害者のインクルージョンと平等性に関する世間への周知と議論の促進)」「Removing barriers between the general public, the users and the developers (世間、器具の使用者、技術開発者間の障壁の除去)」である (CYBATHLON, online)。本大会は、障害者と技術開発者が協力して、日常生活動作に近い形の6競技 (脳コンピューターインタフェースレース、機能的電気刺激自転車レース、電動義手レース、電動義足レース、電動外骨格レース、電動車いすレース) を実施することが最大の特徴といえる。2020年大会では、慶応義塾大学が3位、和歌山大学が4位に入っており、日本においても今後注目を集める取り組みであろう。

以上、パラリンピックの歴史を振り返るとともに、競技スポーツとしての問題の一つを紹介してきた (その他にも多くの問題・課題がある)。選手の努力に加えて、競技用の義足や車いすの発展に伴い、障害者スポーツについて「なんとなく知っている」「実際に見てみると想像していたよりスゴイ」といった時代は終わり、スポーツの統合 (インクルージョン) が進められるところまでやってきた。現時点で、様々な問題に対する結論を出すことは非常に困難であるものの、このような進歩の中で多種多様な議論が起こることで、本当の意味での「多様性の理解」が深まっていくのではないだろうか。

## 付記

本稿は、神戸親和女子大学人権教育NEWS LETTER第43号に掲載された記事を一部加筆・修正したものである。

## 文献

CYBATHLON (online) Concept and Goals. <https://cybathlon.ethz.ch/en/cybathlon/mission-statements-goals>, (accessed 2021-03-03).

International Paralympic Committee (online) 2: Historic "One Bid, One City" agreement. <https://www.paralympic.org/feature/2-historic-one-bid-one-city-agreement>, (accessed 2021-03-03).

World Athletics (2020) C2.1 - Technical Rules. <https://www.worldathletics.org/about-iaaf/documents/book-of-rules>, (accessed 2021-03-03).